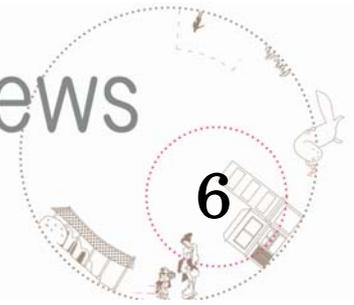


エコロジー空間論 News



2011年5月26日(木) 14:40~16:10

京都精華大学春秋館101号室

第6回 鞍田崇(総合地球環境学研究所) 「KINO MINGEI」



鞍田さん

○はじめに

エコロジー空間：バックグラウンド(背景)

【前景】 foreground 可視化・意識化・言語化される諸対象/経験の内容：“美しさ”

【背景】 background 美しさを美しさとして認識しうる基盤/経験の場：“愛おしさ(仮)”
(あるべき) エコロジー空間とは、空間への「愛おしさ(仮)」に根差す。

(第1回講義より)

○これは何かわかりますか？

窰(穴窰 あながま)

平安時代の窰跡。窰の原点。須恵器(陶質土器)、灰釉陶器の焼成。

古代から中世にかけてのもの。縄文時代は、野焼きの土器。地面の上で焼く。

焼成温度の低→高：土器→陶器→磁器(土も違う)

高い焼成温度を作り出すために、窰を利用する。火を閉じ込める。

分焰柱から火を細く、勢い良く出す。登り窰が登場する前の、高度な技術をもった窰。

東海地方中心。

京都市指定史跡、中の谷4号窰

昭和62年(1987)に発掘調査。

実は、精華大春秋館の目の前の山にある。

ぬりえジョージ→トーテムポール→倒木を越えて、徒歩5分。

⇒平安京が、焼物の消費地だけでなく、生産地でもあったことを示した。

村上由美子さん(6/16講師)からの宿題

- ・歴史をふまえた空間づくりのケースワーク
- ・この窰跡に人が集うようになるには、どうすればよいか。
- ・各グループで考えて、6/16に発表。



中の谷4号窰

○精華大界限(木野)の窰

松野鰻窰(旧松野邸)

昭和38年(1963)土地購入、昭和48年(1973)より店舗を始める。

設計：上田恒次、施行：中島新一郎

南棟：昭和40年(1965)、主家：昭和42年(1967)

上田恒治との交流がきっかけで居を構える。腰壁の焼物板は上田が手がける。

すぐ傍らに上田恒次の家。



松野鰻窰(旧松野邸)

上田恒次：大正3年（1914）～昭和63年（1988）、陶芸家。

清水の五条坂に窯を構える陶芸家、河井寛次郎に昭和8年（1933）入門。

焼物のある暮らし。その暮らしを実現するための家を構想。

建築談義をして、河井が入門を認める。

⇒上田の住まい方の構想に民芸の本質をみたか。

上田恒次邸

設計：上田恒次、施行：長谷川末吉

西棟：昭和12年（1937）、東棟：昭和17年（1942）、

長屋門・納屋：昭和43年（1967）

玄関東に登窯。台所、食堂をはさんで西には居室・客間がつづく。

自邸、旧松野邸や保田與重郎邸のような住宅のほか、十二段家のような店舗も手がけた。

上田にとって、木野の自邸が陶芸と建築両方の原点。

⇒ライフスタイルの創造

この界隈を「倉敷のような場所」に

⇒コミュニティの再構成

地域性、伝統、それらの混合した独自の景観美。



上田恒次邸（正面、西棟）

○オルタナティブとしての「民芸」

- ・主流に対する傍流（オルタナティブ）の意義

FINE ART（美術）に対する CRAFT（工芸）、工芸のなかで、機械生産に対する手仕事、手仕事のなかで、鑑賞工芸／個人工芸に対する民衆工芸⇒「民芸」（柳宗悦いわく、「下手物」）に行き着く。

- ・時代の価値観を相対化

時代の潮流から振り落とされるものに注目。

- ・主流の否定ではなく、さまざまな傍流を確保することに眼目がある。

○「肯定のみされる平凡、偉大な平凡」

…あの平凡な世界、普通の世界、多数の世界、公の世界、誰も独占することのない共有のその世界、かかるものに美が宿るとは幸福な報せではないでしょうか。

…平凡への肯定、否、**肯定のみされる平凡**。私は民藝品に潜む美に、新しい一真理の顕現を感じるのです。私はこの**偉大な平凡**の中に、幾多の逆理が啓示されてくるのを順次に見守っています…。

（柳宗悦「民藝とは何か」）

○震災の問いかけ

非日常が日常化している。逆転された平凡から見えてくるもの。

私たちがもつ平凡とは何か。

相対化すべき価値観とは何か？

取り戻されるべき「平凡」とは何か？



反転したレールと枕木

[質疑・ディスカッション]

学生：

精華大の敷地内に窯があるのは見に行きたい。

学生：

あまり関係ないが、鰻は食べてみたい。

村松：

平凡とは何かを考えたが、鰻屋は平凡ではない。特殊。

鞍田：

柳が平凡と言った民芸も、いまでは高い値が付く。ハイソサエティの娯楽。現在はリバイバルな雰囲気がある。デザイナーによる新民芸など。今、思想としての「民芸」とは何か？そこで柳の言葉を問い直す必要があると考える。

村松：

ライフスタイルや3Rとは違う。だから、民芸には皆があこがれる。

学生：

民芸は生活の中にとけこんでいるはずの、平凡なもの。現在は、百貨店やデパートの企画で高額で出回る。平凡さとは何かと考えてしまう。

村松：

本質をもった民芸ができないから、デパートの民芸は、ワンポイント。観賞用。ここでいう平凡とは、ライフスタイル全体。それが出来なかった場合にどうするか。

鞍田：

パターン化された民芸。そこに共感はずらいが、柳の文章に惹き付けられ、そこにほだされた上田のような人々に着目したい。

学生：

上田恒次は焼物のために建築をやりこなす。鞍田さんは、哲学のために、何をやりこなすのか？

鞍田：

焼物と建築はある延長線上にある。建築まで広げないと、焼物のある暮らしが完成しない。自分は、焼物こそ行わない、建築こそ行わないけれども、言葉の世界から、見るしかない、感じるしかないものに迫る。また、研究者として、対面する社会に迫る。

神松：

人間の幸せについて調査するときに「ものの豊かさと心の豊かさ、どちらを求めますか？」という乱暴な質問がある。民芸は、ものの豊かさから心の豊かさを得ることに始まったと思う。自分達が平凡な状況ということ、どのように豊かにできるかというところがポイント。何も無いところで楽しみをつくる。例えば、子供を野外に連れて行って、遊ばせる。自然が遊ぶ素材になるが、子供ははじめできない。そこで、ゲーム、ものが介入する。オルタナティブに関して、素材に創造力をはたらかせるといことが、ものづくりのヒントになると思う。冒頭の窯の課題に関して、カフェをもちこまない人が集まれないのか、窯自体から発想できるのか。

村松：

民芸をやっている人たちは、大正のブルジョワジー。ものの豊かさをもともともっていた。だからその先の、心の豊かさに辿りつけた。

林：

上田が河井のもとを訪れたとき、建築談義で盛上がった論点は？

鞍田：

生きていたら聞きたい。保田與重郎が『月間民芸』のなかでエピソードを書いている。

林：

上田邸が面白いのは、立面としては日本の家屋の一般的な見えがかりをしているが平面的に見ると変。いわゆる郊外の大正モダンとは全く逆。入ってすぐ火まわりがあるのは、とても原始的で独自の。

村松：

寺、僧房のよう。

林：

火がこの人の生活の中心にあって、それが平面にねじこまれている。時代背景としては、モダニズムの機能主義的な建築が導入され大量に建てられるなかで、社会的には町屋がモダン化していく。平凡のすごさは、平凡と思えること自体が社会のかたちになっている。バーナード・ルドフスキーによって「建築家無しの建築」という展覧会が1960年代に起こる。白川郷などをみても、すごいなと思っても誰がつくったのかは考えない。時間をかけて、社会に平凡として認められていく。第5回の講義で塚本さんが紹介した、東京に町屋を一軒立てるということもそう。平凡は簡単なようで、時間を相手にしている

田口：

私たちが京都市内でフィールドワークを行うときに、見つける平凡とはどのようなものか。その平凡は、将来デパートに並ぶのか。

鞍田：

京都には「餅」とつく食堂が多く、ルーツに関係しているのでは。京都の暮らしの背景。

村松：

京都の平凡は、寺、山。平凡は、バックグラウンド。エコロジー。

次回：2011年6月2日（木）14：40～16：10

京都精華大学春秋館101号室

第7回 堀田義太郎（立命館大学、倫理学） 「障害と暮らし」

編集後記

第6回は、第1回でコーディネーターとしてお話された鞍田さんが、「エコロジー空間：バックグラウンド(背景)」について、精華大の足元から、浮かび上がらせてくださいました。上田が自邸の建築、あるいはその界隈に浸透させた暮らしのあり方は、まさに前景化されていない「愛おしさ」を実現させるもののでしょうか。ただし、柳の言葉と対照的に、平凡なものから抽出された価値がデパートに並ぶことを考えると、私たちはエコロジー、平凡を意識に上らせつつも、それを背景につなぎとめておく社会を考える必要があるのかもしれない。

文責：田口純子（東京大学生産技術研究所村松研究室）